

ちな字界に、新鮮なる視角を与えられたといえよう。

川口博「百年戦争期フランスにおける傭兵の問題」。罇田氏のテーマと類似した性格のもので、傭兵野武士団の歴史的役割を扱ったもの。野武士団は、封建的軍制の補強として登場しつつも(p.38)、「この買収と内部分裂を利用した国王によつて否定せしめられ」(p.40)、「勅令騎士団」(Compagnies d'ordonnance)にその席を譲る。傭兵野武士団のもつ経過的な運命を、手際よく纏めていられる。

瀬原義生「スウイス傭兵の成立」。ヨーロッパ近代国家の形成期—ブルゴーニュ戦争、イタリヤ戦争、フランス絶対主義—を、詳細に分析しつつ、傭兵雇主側の国際情勢を論究、これと対応的に雇、われるスウイス傭兵の実情を摘出。傭兵における農民兵の重き比重を重視し(p.53)、これがスウイス側封建的危機の表白に他ならない点を抉出する。

今津 晃
山本幹雄「アメリカ革命戦争とドイツ人傭兵」。先づ今津氏は、ドイツ人傭兵使用が、独立論を刺戟した米國側の事情と、他方、劣弱ドイツ兵雇傭を断行した英本国内部の政情

を分析する。これに続き山本氏は、革命戦争における軍事史の概略を述べる。かくして英國が窮余の策として採用したドイツ人傭兵は「一方で戦闘力供給の側面から、他方……反英國感情の醸成という側面から、『革命』の収拾をかえつて『独立』達成の方向にとぎはなつてゆく一つの契機を提供してつた」(p.55)と。論旨明瞭であるが、敢えて蜀望の念を抱くならば、傭兵問題を中心に据え、論文を立体的に構成して欲しかった。

以上十一論文に互つて、未熟をも省みず無難な紹介の筆をとつてみた。勿論その批判は他日を期さねばならぬ。何故なら元來批判は、原書、史料に関する充分な知識と、且つそれを貫く史観を持して、始めて可能であるから、寧ろ私は、泰西の研究においても稀なこの分野の分析を、一書に纏め上げられた共同の成果に、満腔の敬意を表したい。とりわけ政治過程と社会経済過程との綜合という形で、傭兵研究に新たな道標を示されたことは、大いなる成果といわねばならない。兎も角本書は、独り西洋史学徒のみでなく、広く歴史科学を学ぶ者の良き伴侶である。とりわけ現下日本の直面する再軍備論を前にし

て、傭兵制度の辿つた悲劇的運命は、充分省察を要するであらう。本書の一読を御契めする次第である。(昭和三十年三月三十一日發行 比叢書房刊、五二八頁、定価八〇〇円)

— 田中 裕 —

Chung-li Chang,

The Chinese Gentry

Studies on Their Role in

Nineteens-Century Chinese Society
(University of Washington Press, 1955)

—

本書は、ワシントン大学極東・ロシア研究所で行われている中国近代史研究プロジェクトの一業績である。著者はこのプロジェクトのスタッフであるが、序文によれば、数名のスタッフの共同研究の成果が盛り込まれているようである。このプロジェクトの目的は、伝統的中國社会の分析、および近代において西歐とソヴェト・コミュニズムの圧迫がもたらした中國社会の変化の究明にあるようである。本書は十九世紀に重点がおかれ、西歐勢力の圧迫の下に、中國社会がどのような変化

を受けたかという問題設定の上に、中国社会の一社会層であるジェントリーをとりあげているのである。

本書の題名にあるChinese Gentryとは、紳衿の訳語である。もともとイギリスのジェントリーは世襲であるが、中国のジェントリーはそうではなく、この訳語は必ずしも適当ではないが、ただ欧米人読者にたいする便宜上、この言葉を用いたと、プロジエクトの研究主任フランツ・ミツチエル氏は、彼が書いた序説の中でことわつてゐる。ミツチエル氏の序説は、九頁の短文であるが要をえておき、中国の社会層を身分上からジェントリーとCommoner (平民)と賤民の三層に分類してジェントリーの支配階級としての地位を説明し、また中国社会の西洋人による研究史をも簡単にのべて本書の立場を明かにしている。

二

評
本書は四部に分れている。第一部は、十九世紀におけるジェントリーの構成と性格の研究にあつておられ、ここで著者は、ジェントリーをいくつかのタイプに分類して、それぞれのタイプの特徴を説明し、またジェントリーが中国の政治・経済・社会・文化の各分

野においてもつてゐる様々の特権、その特権から受けとる利益、あるいはジェントリーの行動が果す様々の機能を明かにしている。第一部は、いわば第二部以下の本論にたいする導入部であるわけである。ジェントリーのタイプとしては、まずレギュラーなジェントリーと、イレギュラーなそれとがある。これはジェントリーの資格を得るに至るコースの相異による分類である。レギュラーなジェントリーとは、いうまでもなく正式の試験の合格者であつて、資格には生員・挙人・進士などの段階がある。イレギュラーなコースは、試験を受けずに、資格の購入すなわち捐納によるものである。その代表的なものは監生である。二つのコースは、もちろん全く分離したものではなく、途中で様々に交錯してあり、途中で乗りかえができる。もう一つのジェントリーのタイプは、上層ジェントリーと、下層のそれである。これはジェントリーの資格の上下によつて分類するものであつて、たとえばレギュラー・ジェントリーの下層は生員であり、上層は挙人・進士・貢生などである。下層ジェントリーになるには、童試すな

わち地方における三回の試験(州県試、府お

よび直隸州試、省単位の院試)に合格せねばならず、上層ジェントリーになるには、さらに郷試、会試、殿試に合格せねばならない。もちろん、この試験コースには多くの例外があり、そこにイレギュラーなコースが派生するのである。ジェントリーは儀礼的、司法的、経済的な様々の特権をもつてゐる。これらの特権は法律的に定められたものの外に、ジェントリーがその勢力を利用して、非合法的に享受しているものも多い。これら非合法的な特権は、十九世紀に清朝中央政府の権力が弱体化するにおよんで、とくに顕著になつた。ジェントリーの社会的機能も、この特権と密接不可分にむすびつてゐる。ジェントリーは、官憲にたいしては、いわば地域の利益代表であり、官憲と平民の仲介者である。

その点で、ときには官憲と利害の対立する場合があるが、またその反面では官憲の地方行政の重要な協力者でもある。とりわけ租税徵収にあつては、ジェントリーの協力が不可欠であり、そこにジェントリーの租税中飽、滞納、脱税などの弊害も発生するのである。この外、ジェントリーは地方の社会福祉の面で

救貧、救災、道路修築、水利灌漑など、また文化面で儒教道德の普及維持、寺廟の管理、学校の経営、地方志の編纂など官憲の手のとどかぬ分野で積極的な役割を果し、いわば社会の Status quo の維持に貢獻するのである。

十九世紀の中葉、すなわち太平天国の前後から、ジェントリーにはさらに重要な機能が加わつた。それは社会保安の指導であつて、清朝軍隊の弱化にともない、地方の軍隊組織の担い手としての役割が、官憲からジェントリーの肩に移つた。これは十九世紀後半のジェントリーの質的、量的変動と密接な関係をもつようになるのである。

第二部は十九世紀ジェントリーの量的分析であつて、これが著者の最も力をそそいだ研究であり、いわば本論ともいふべきものである。著者は欽定字政全書、大清会典事例その他の資料から必要な数字を推計し、その推計にもとづいて、ジェントリーの一平年 average year における総数、そのレギュラー、イレギュラー別、上層下層別、各省別、年代別などの構成比率、変動率を推計するという方法をとつている。その代表的な例として、生員の一平年における総数を推計する方法を

のべると次のようになる。まず一平年当りの試験頻度であるが、これは、生員になる最終試験である院試をとると、院試は原則として三年に二度であるから、その頻度はろである。しかし事實上は、太平天国前後に三年に一度であつた地方もあるようであり、また武生員(すなわち武官の生員)は原則として三年に一度であつた。つぎに生員の各省定員で

ある。これは十九世紀の前半と後半とは変動があり、また地方によりその増加は一様ではなかつた。定員総額は、前半の約二万五千名から後半の約三万名に増えている。つぎに生員になつた平均合格年齢と、生員の平均死亡年齢である。合格年齢は、約八〇例からみて最低十六歳、最高三十九歳、推定平均合格年齢は二十四歳である。ついでながら著者の推定では、举人のそれは三十歳、進士は三十五歳となつている。平均死亡年齢は約一三七一例から計算すると、一七三二—一七八〇年間は六三・六歳、一七八一—一八三〇年間は六二・二歳、一八三一—一八八〇年間は五七・八歳としいに低下している。著者はその最低をとつて五十七歳としている。これは二十世紀になつて行われた実態調査にもとづく平

民の平均死亡年齢が最高で三十歳台であるのに比較して、生員が平民より少くとも二十年ちかく長命であることを示している。平均死亡年齢から平均合格年齢を引くと、生員としての平均生存年齢が出てくる。これは三十二年となるわけである。かくて著者は一平年における生員総数(T)をつぎのようにして推計するのである。

T = 平均合格年齢 × 平均定員 × 試験頻度

著者はかようにして、ジェントリーの各数値を推計するのであるが、その数値から導き出される結論を要約するところなる。太平天国前(十九世紀前半)のジェントリー総数は約一一〇万、家族を含めると五五〇万、中国総人口の一・三%になる。太平天国後には、これが一四〇万、家族を含めて七〇〇万を越え総人口の一・九%に増加している。かかる増加をもたらしした主要契機は太平天国であつて、政府は軍事的、財政的必要から定員を増加し、他方、地方官憲が定員を無視して増加させた場合もみられる。構成別変化をみると、上層ジェントリーの増加がめだち、十九世紀前半、全ジェントリー中の上層ジェント

リーの占める比率一―%が、後半には一四%となつてゐる。またレギュラーよりもイレギュラーの増加率が顯著で、前者の増加率二三%にたいして、後者のそれは五〇%にのぼつてゐる。かかる量的変化は、太平天国前後を境界にして、その前と後とで、ジェントリーの政治上社会上における地位、機能に変化があつたことを示すものである。その変化とは清朝中央集権の弱体化、ジェントリーの支配勢力の増大、捐納制度の拡大による科挙制度の崩壊の開始、平民の負担の増大などである。

紹介が簡にすぎるので、以上のような数字の操作は或いは危つかしく感じられるかもしれないが、著者は相當に慎重綿密に統計を操作しているのであつて、その努力は高く評価すべきであらう。

三

第三部は、十九世紀ジェントリーの試験生活と題して、科挙試験の内容を説明している。そして制度としての科挙が、その実施にあつたつて、様々の弊害をかもし出し、事実上それが崩れて行く過程を追求してゐるのである。たとえば、科挙試験は(賤民を除けば)、

理論上は機会均等をうたつてゐる。しかし實際には、機会均等の精神が存在したにすぎず、受験にあつたつては多くの不平等が存在したこと、その不平等は、つきつれば受験者の家族(あるいは宗族)の富と勢力と家系などにもとづくこと、しかも十九世紀になると、この平等の精神すらも消滅し、科挙制度の決定的な崩壊が起り、十九世紀末から二十世紀初期にかけて、それが近代的な教育制度にとつて代られて行くことをのべてゐる。

第四部は、十九世紀ジェントリーの列伝の量的分析である。著者は各省通志(通志が不完全な省では府県志をもつて補う)の列伝から、ジェントリーの五四七三名のケースを抽出し、これを様々のやり方で分析してゐる。まず機能的分析では、ジェントリーを積極的ジェントリーと消極的ジェントリーとに分け、積極的ジェントリーの活動分野を八つのカテゴリーに分け、省別、時代別の数字の変化をみることに、地域的、時代的なジェントリーの機能の変化をとらえようとする。つぎに、ジェントリーの動態分析では、ジェントリーを *established gentry*(父または祖父の代よりジェントリーであつた者)と *newcomer*

(本人がはじめてジェントリーに成り上つたもの)とに分け、十九世紀ことにその後半において後者の比率が増大したことを証明し、その他、地域別、上下層別の比率およびその変化をのべてゐる。最後にジェントリーの経済状況であるが、これは列伝に記載が比較的乏しく、推定が困難であるが、ジェントリーの富の源泉として、地代、ビジネス、その他の個人的活動などを分類し、たとえば地域別にみれば、湖南省などは所得源泉として地代の比率が高く、これにたいして安徽、広東などはビジネスの比率が高いことを明かにしてゐる。しかし著者もはじめに断つてゐるように、第四部の研究は、わずか十頁の短文であつて、まだ試論の域を出てゐない。

四

本書は、十九世紀ジェントリーを全般的にとりあつかつており、ジェントリー、あるいは科挙の制度や具体的内容に関しても、もちろん相當のスペースをさき、よくまとめてあるが、この点では、すでに宮崎教授著「科挙」が出ており、後者の方がはるかに詳しく、また具体的である。ただ本書は地方志などにも

とついで豊富な実例を引用してあり、この点は大いに参考になる。また、ジュントリの政治、経済、社会各分野における活動にして、その結論は、日本での研究と大体一致しており、特別に目新しいものはない。本書の本領は、ジュントリの統計的研究にあるのであつて、それが著者の目的なのである。こういう数量的研究は、著者もいうように、社会科学の基礎的方法の一であり、著者はこの方法を、歴史的研究にあてはめ、ジュントリ研究の第一着手としたのであつて、これは今後さらにちがつた方法、ちがつた角度から対象にアプローチすることによつて、一層完全な研究に近づいてゆくことであろう。ともあれ、本書は、その論旨も手がたく慎重であり、詳しい附註と共に、一度よんでおくべき書物であることに、まちがいはない。

——北村敬直——

「梅原蒐集朝鮮考古学資料」の公開について

京都大学文学部考古学教室の梅原末治教授は、大正七年九月以降昭和廿年まで、朝鮮總督府古蹟調査事業に関与し、その間、多くの業績を挙げた事は、朝鮮總督府刊行の古蹟調査報告、同特別報告、朝鮮古蹟研究会の調査報告その他によつて知られる通りである。それらの古蹟調査の傍ら朝鮮總督府博物館、李王家美術館、平壤府博物館等の公の収蔵品をはじめ、民間蒐集家のコレクションに於て梅原教授が作られた記録は、亦長大なものであつて、実測図、拓本、写真焼付の類が常に一万点を越え、中には他の調査員による発掘で、未刊の写真や記録が含まれている。

敗戦以来の国際事情は周知の如くであつて、朝鮮考古学の研究に当る日本人学者が生の資料に接する機会は当分来ないと思われる。而も朝鮮側においてさえ、朝鮮動亂の戦禍甚しく、考古学的資料の安否が氣遣われる有様である。かように考えると右の梅原教授作製の資料がいかに貴重なものであるかがわかる。従つて同教授がこの資料を一般研究者に公開する事は学界が挙げて歓迎する所とならう。

梅原教授は昭和二十八年秋以来同教室員を督促して整理を行い、この程そのうちの六千余点についてカード三通宛の作製と未刊資料の複写を終つたのを機会として、これを一般に公開することとした。

同資料は考古学教室に備えられてあり、写真焼付、実測図、拓本及び記録の各葉ごとに番号が附され、カードによつて検索するように整理された。

本資料はその性質上ひろく内外の研究者によつて利用される事が望ましいので、それについて次の様な条件を設けた。

- (一) 本資料中の写真、実測図を利用して發表する場合は必ず「梅原蒐集朝鮮考古学資料」と明記し、資料番号を附する事。
- (二) その写真に就いては原板が京都大学文学部考古学研究室に保存してあるので、それから直接の印画を希望する研究者は写真番号によつて実費（送料を含む）を添えて同研究室に直接申込む事。
- (三) 本資料を利用した著作を發表された場合、編著者は必ずその著作を右考古学研究室に寄贈されたき事。

(有光教一)